

1992年

望月洋史 個展

ぎゃらりいセンターポイント

絵画雑感

望月洋史

絵画というものは実にむずかしい。気持ちがかたかぶっていたり、どこか心の底に落ち着きがない時など、いくら平静を装って描いても画面に統一が保てなくて、ただそこにあるものは自身の落ち着きのない精神の投影を見るのみである。

しかし自分のいまやろうとしている絵画上の仕事は、ある日、ある時の心持で描いた魚を素材としたもので、ほとんど単一な画面に見えるかも知れないが、自分にとっては一枚一枚に雲泥の差を生じたりさせている。その一枚一枚を一定期間描いた上で、それぞれ並べかえたりしながらある了解の上に、取舍選択を加えながら一枚のパネルに貼ってゆく。然うやって出来た作品を、個展の会場に展示して一週間ほど眺めていると、パネルの中の一枚一枚が離合をくりかえし、統一と同時にバラバラに、バラバラと同時に統一を視覚の上でくりかえし感情に訴えかけてくる。それは感情のキュウビズムとはいえないだろうか。

しかし、そうして会場内に一人黙然と佇み眺めていると、ああここが良かったのだななどと思われる一枚の墨絵を見るにつけ、それを描いた日の心持ちなどがこもごも湧いてきて、暗澹たる思いに出くわすのである。やはりその日も気持ちがかたかぶっていて、心の底に落ち着きのない日であった。この絵は吐き捨てるしかないのだな、などと思っていたものであったりする。そんな絵が予想に反して画面の中で効果的な位置を占めていたりする。

自身の心が澄んでいて、よし決まったなどと思っていたものが意外と窮屈であったりする。

ただ言えることは、気持ちがかたかぶっていたり、心の底に落ち着きのない時、絵画が猥として霧散し、自身の人生が纏まりもなくどうしようもなくなった時期。

それはある意味で実人生の底流に潜む混沌。その混沌がなければ実人生に養分は行き届かず、下手をすれば実人生を破壊しかねないとも思える混沌を一定期間へなければ決して絵画が自身に握手を求めてくれないような混沌の後に描けた絵にかぎって、この先を予感させる一枚であったりする。

いえることは、混沌の時期に絵画にどれだけしがみついていたか知らない。

